

# 飛鳥の苑池―嶋宮の池と舎人達とねりの歌―

京都教育大学 名誉教授

和田 萃

## 一 はじめに

明日香村島庄あしたのむらに所在する石舞台古墳とその周辺一帯は、飛鳥歴史公園石舞台地区として整備されており、全国各地から多数の人々が訪れ、飛鳥の景観を愛で古代の歴史に思いを馳せる観光名所となっている。とりわけ春秋の好季節には人々であふれ、近年では外国からの訪問者を見かけることも多い。

かつて石舞台古墳の西方域には水田や畑が広がり、飛鳥川近くには高市たかいち小学校があった。四十年ほども前のこと、高市小学校の講堂で「飛鳥古京を守る会」の設立総会が催され、参加した日のことを思い出す。その後、高市小学校は村内の飛鳥小学校・阪合小学校と統合されて明日香小学校となり、場所も中央公民館の南方に移った。旧高市小学校の校舎跡は整備されて、現在では広大な駐車場となっている。

飛鳥における代表的な苑池とし、嶋庄遺跡

の苑池えんちと飛鳥京跡苑池があり、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）により発掘調査が行われている。両遺跡の発掘調査成果については、本誌所収の菅谷文則・東影 悠の両氏の論文を参照されたい。前者は七世紀前半から平安初期、後者は七世紀中葉の斉明朝から平安時代まで存続していた苑池である。

本来であれば、飛鳥の苑池について総論をまとめるべきであるが、紙幅との関わりもあり、ここでは主に嶋宮をめぐる歴史的背景を、日本古代史研究の立場から考察して、責めを塞さぎたく思う。菅谷氏の論稿の内容と重なるところがあるかも知れず、その節にはお許しいただきたい。

## 二 嶋宮の池

『日本書紀』の推古三十四年（六二六）五月二十日条に、蘇我大臣馬子が薨じ、桃園墓ももこのかみに葬られたことを記し、加えて簡略な経歴を記す。大臣馬子は蘇我大臣稻目の子で、武略

や辨才があり仏教信仰にも厚かったこと、飛鳥川の辺に家があつて、庭の内に小なる池を作り小さな嶋を池の中に築いたので、人々は「嶋大臣」と呼んだという。

桃園の墓については、明日香村島庄所在の石舞台古墳とする説がほぼ確定している。しかし馬子の家の庭に「小池」を掘り、池の中に「小嶋」を築いたとの記述には問題が多い。

『日本書紀』には大臣馬子の家として、石川の宅・槻曲の家・嶋の家がみえている。大臣馬子が嶋の家に住むようになった時期は未詳。しかし崇峻元年（五八八）に大臣馬子により、法興寺（飛鳥寺）の建立が開始されている。また崇峻五年（五九二）十二月八日に、額田部皇女は豊浦宮で即位した。推古天皇である。したがって蘇我大臣馬子は、推古天皇の即位前後から嶋の地に住んだ可能性が大きい。しかし家の内に池を作り嶋を築いたのは、後にもふれるように推古十五年以降のことではないだろうか。

昭和四十七年～四十九年（一九七二～

七四)に、檀考研により実施された島庄遺跡の発掘調査で、一辺四二<sup>尺</sup>にも及ぶ広大な方形池が検出された。推古朝に開鑿された池であり、平安初期に至るまで下流域への灌漑機能を果たしていたことが判明している。したがって「小なる池」の表現には問題が残る。あるいは蘇我大臣馬子を貶めるために、『日本書紀』の編纂者達が「小池」とした可能性もあるかもしれない。

私の記憶では、発掘調査の最終段階で、池の中心部にごく小面積のトレンチが設定され、調査が行われた。小さな嶋の有無が問題視されたと思しい。しかし嶋は検出されなかった。そのため嶋宮の池と断定することが避けられた経緯がある。

その当時のこと、私は京都大学文学部国史研究室の助手として勤務していたが、藤原宮跡から出土した木簡の「水替え」や整理のため、時折、旧檀考研の二階で作業をすることがあった。当時、奈良教育大学の嶋倉巳三郎先生も、嶋庄の方形池から出土した植物の樹種鑑定でお見えになることがあり、各種の植物についてお教えいただくことがあった。

ある日のこと、大量の桃の種を鑑定されていたのでお尋ねすると、嶋庄の池から出土した大型の桃の種で食用になるとのこと。直ちに思いついたのは、石舞台古墳の一角が『日本書紀』雄略七年是歳条に「上桃園・下桃園」とみえることだった。馬子が住んだのは下桃園の地で、家の池の堤に数多くの桃が植えられていたのである。懐かしい思い出

である。

右にふれた「小さな嶋」の有無に関連して、少し後に韓国の慶州市で重要な発見があった。一九七五〜七六年に、月城の東北に接した雁鴨池の発掘調査が行われた。その結果、雁鴨池は、東西二〇<sup>尺</sup>、南北一八〇<sup>尺</sup>の方形区域内に造成された二五、六五八平方<sup>尺</sup>の池で、北岸と東岸の水際に岩と造山を配し、池の西北の隅には五九六平方<sup>尺</sup>の中島、中央の南寄りに六二平方<sup>尺</sup>の小島、東南に一、〇九四平方<sup>尺</sup>の大島を配しており、池の西側と南側からは建物跡・回廊跡・垣牆跡が検出された。

発見の報に接して興味をもったのは、池の中に大・中・小の三島があり、なおかつ小島は、池の中心部から、やや南西寄りに位置することであった。『三国史記』によれば、雁鴨池は文武王十四年(六七四)頃に造営されたらしい。雁鴨池の事例をみると、古代東アジア世界における苑池は、周辺の景観に適った所に島を築いたのであり、必ずしも池の中央部に限らなかつたのである。したがって嶋宮の池でも、小島は池の中心部ではなく、嶋宮を取り囲む景観に適った所に作られた可能性がある。あるいは三神山を模した三つの嶋が築かれていた可能性もあるだろう。そうした意味では、今後、池の全域調査が望まれる。昭和六十二年(一九八七)九月、島庄遺跡の第二十次で、方形池のすぐ東北に接した所から、七世紀半ばよりやや古い時期の大型建物と、その背後に荒磯を思わせる川の遺構が

検出された。また七世紀後半の二棟の建物も検出され、大臣馬子の嶋の家は、「大化の改新」後に宮廷附属の離宮となり、嶋宮となったことがほぼ言えるようになった。

第二十次調査の現地説明会の日のことは、今も眼に鮮やかである。当日、末永雅雄先生は、発掘現場に車椅子でみえた。車椅子を押していたのは亀田 博所員。末永先生の関西大学での教え子であり、第二十次調査の現場責任者でもあった。先生は終始にこやかで、検出された川の遺構について、戦前に調査された宮滝遺跡の吉野川の景観を模したもので、と発言されたことが記憶に残っている。本稿でとり上げる飛鳥の苑池について、亀田氏はまことに優れた研究を発表された。早世されたのが残念の極みである。

近年、明日香村教育委員会により、かつての高市小学校西側の校庭跡や方形池周辺の発掘調査が進められている。その成果に基づけば、推古朝に遡る大型建物群の方位は方形池の方位に合致することが判明しており、当時から一辺四二<sup>尺</sup>の方形の大池が所在していた可能性が高まった。推古朝の何時頃に大きな池が掘られたのか、またその目的は何だったのか、今後の検討課題となる。

### 三 推古朝の地溝開発

大臣馬子の家の大池に関連して想起されるのは、推古朝において大和・山背・河内で大規模な池溝開発が行われたことである。推古

十五年(六〇七)に、大和国に高市池・藤原池・肩岡池・菅原池を作り、山背国では栗隈に大溝を掘り、河内国に戸刈池・依網池を作ったとみえる『日本書紀』。大和国に限れば、高市池と藤原池は飛鳥に近い所に作られた。高市池は、香具山西北麓の埴安池である可能性が大きい。

藤原池は、明日香村小原の近くに造られた池であろう。推古十九年(六一一)五月五日に、わが国最初の葉獵が菟田野(宇陀市大宇陀町)で行われた。その日の払暁、官人たちは藤原池の辺に集い、騎馬で菟田野に赴いた。中臣氏(藤原氏)の本拠地であった明日香村小原に隣接する同村東山に、古代の池を思わせる「マキド池」が所在する。この「藤原池」の地名に基づいて、中臣氏の本宗は後に「藤原氏」の姓を賜ったとみてよい。

先にふれた如く大臣馬子の嶋の家で、大池を掘り小嶋を築いた時期は不明である。大和における大規模な池溝開発は推古十五年のことであり、馬子が薨じたのは推古三十四年五月のことであるから、大臣馬子の嶋の家で大池が掘られたのは、推古十五年・推古三十四年の間に絞り込めるかと思う。その時期に馬子は広大な家の内に大きな池と小嶋を作り、さらに池の西側から飛鳥川に至る一帯を潤す、大溝を作った可能性がある。飛鳥の地でも、新たに池溝開発が行われ、大臣馬子とそ

「嶋大臣」の呼称についても、池の中の「小嶋」に基づくものではなく、「嶋」の地名に由来する可能性もあるのでは、と思う。「嶋」は「四面が水で囲まれた比較的小さいものの呼称」であり、池・川・沼・海などに所在する。しかし「嶋」はまた、別の意味をもつ。二つの河川に挟まれた狭い一帯を、「嶋」と称する事例がある。

すぐに想起されるのは、欽明天皇の磯城嶋金刺宮の呼称である。初瀬谷を下り三輪山の南麓を流れる初瀬川(三輪川とも)と、南の粟原川(桜井市粟原から忍坂・外山をへて、寺川に合流する)に挟まれた一帯を、古来、「磯城嶋」と称している。桜井市外山の城島小学校のすぐ近くに、小字「式島」の地名が残る。延久二年(一〇七〇)の「興福寺大和国雑役免坪付帳」に、城島荘という荘園がみえ、その西半分が小字「式島」である。

こうした事例を勘案すれば、飛鳥川に注ぐ細川と、岡寺山から流れ「犬ヶ瀬」で飛鳥川に注ぐ小川との間の空間が、「嶋」と称されたと考えられる。「嶋大臣」の呼称も、馬子の邸宅内の大池にある小嶋に由来するのではなく、広大な「嶋の地」に住んだことに基づく呼称とみるべきであろう。

推古朝に馬子の邸内で大池が造られ、池の中に小嶋を築いた歴史的背景を考えてみよう。

朝鮮半島北部で強大な勢力を誇った高句麗は、四二七年に輯安から平壤に遷都し、安鶴宮を建造した。南宮(正殿)の西門とその西

方に造られた山との間に蓮池があつて、三つの嶋が造られているが、池の中心に嶋はない。池の中に三つの嶋を造るのは神仙思想に基づく。古代中国の山東半島や河北地方では、東方の海中に三神山(蓬萊・方丈・瀛洲)があつて、諸仙人が黄金や白金の宮殿に住み、そこには不死の仙薬があると説かれていた。そうした三神山の思想が中国から朝鮮半島をへて、推古朝に伝わったとみてよい。

推古十九年(六一一)五月五日に、わが国最初の葉獵が菟田野で行われた。それは、高句麗王室で三月三日に行われた鹿の若角を採る習俗と、中国・江南で五月五日に民間で行なわれていた種々の葉草を摘む習俗とを合せ取り入れて、一体化したものであつた。

この葉獵の由来を踏まえると、池に三つの嶋を配する由来は、神仙思想と深く結びついており、古代中国から高句麗をへて、推古朝にわが国に伝わったと推測しうる。推古十五年に飛鳥に近い所に高市池や藤原池が作られ、その少し後に大臣馬子の嶋の家で池を掘り、小嶋を築いたと想定することも出来るのでは、と考える。また嶋は一つではなく、三つの嶋があつた可能性があるかと思う。

#### 四 草壁皇子尊の嶋宮

次に『万葉集』巻二にみえる、草壁皇子尊の殯宮に際して詠まれた有名な歌群をとり上げよう。周知のように草壁皇子は、天武天皇と鷗野皇女(後の持統天皇)との間に生まれ

た。天武には、生母を異にする十人の皇子がおり、草壁皇子の皇位継承順位は第一位であった。天武十年（六八一）一月二十五日、天武天皇と皇后の鸕野皇女は飛鳥浄御原宮の大極殿に出御し、親王および諸臣を召して律令制定を命じると共に、草壁皇子尊を立てて皇太子としたことがみえる。

この日、立太子されたのを契機に、それまで離宮であった嶋宮が東宮とされ、草壁皇子の居住するところとなったと考えられる。飛鳥浄御原宮のすぐ東南に接する所であり、文字通りの「東宮」である。そのようにみてよいとすれば、草壁皇子は薨するまで八年余を嶋宮で過ごしたことになる。

朱鳥元年（六八六）九月九日に天武天皇は崩御し、持統二年（六八八）十一月十一日に檜隈大内陵に葬られた。その後、草壁皇子尊の即位が予定されていたが、持統三年（六八九）四月十三日に二十八歳で薨去し、殯に伏された後、真弓丘陵に葬られた。その候補地として、高取町佐田に所在する東明神古墳が有力視されている。

嶋宮や嶋宮の苑池、さらにその後の嶋宮の経営については、故 亀田 博氏が優れた研究を行われている。ここでは屋上屋を架すこととなるが、少し考える所を述べる。

『万葉集』巻二に、日並皇子尊（草壁皇子）が殯に附された折、柿本朝臣人麻呂が献呈した長大な歌一首と反歌二首がみえ（巻二一六七―一六九）、続いて草壁皇子尊の舎人らが作った歌二十三首（巻二一七一―

一九三）がみえている。『万葉集』では、他に類例がない長大な歌群であり、殯の期間中における舎人達の嘆きや悲しみが歌われている。さらに注目されるのは、『日本書紀』にはみえない、当時の嶋宮の状況や有り様が詳細に伺えることである。

まず目につくのは、舎人らが「み立たしの嶋」（二七八・一八八）、「み立たしの嶋に住む鳥」（二八〇）、「み立たしの嶋の荒磯」（二八一）を歌っていることだろ。いずれも草壁皇子尊が嶋宮の大池の中にある嶋を見、あるいは嶋に降り立って池を見ていた往時を思い出して歌っている。舎人らは、嶋に立って池を見ていた草壁皇子尊を偲び、また宮が荒廃してゆく様を嘆いている。

嶋宮の「勾の池（二七〇）」は、菅谷文則氏がかねて指摘しておられるように方形の池を指し、検出された一辺四二メートルの方形池の呼称とみてよい。「東の瀧の御門（二八四）」や「東の大き御門（二八六）」は、第二十次調査で検出された川（〇六）に架かる橋の入り口に所在したものか。そのほか鳥小屋（一八二）や、大岩の水際に躑躅の植え込み（一八五）もあった。

なお嶋宮の東にも池があつて、鳥が放たれていたらしい。「嶋の宮上の池なる放ち鳥」（二七二）とみえるからである。石舞台古墳の北側、道路沿いに物産店がある。数年前、その少し北方で池の一部らしい遺構が検出されたのを、目にした記憶がある。

草壁皇子尊の殯宮は、嶋宮から西南方向

へ、直線距離にして約三・五キロほど離れた、真弓の岡（明日香村真弓）から佐田の岡（高取町佐田）にかけての一带に當まれた。それで嶋宮の舎人の大半は、日夜、嶋宮から殯宮奉仕のために往復しなければならなかったのだ、嶋宮の維持・管理は次第に手薄となり荒廃したのであつた。『日本書紀』には、殯が終了して埋葬された日時はみえない。舎人らの歌が書き留められたことで、嶋宮の構造が凡そ把握しうる。今後の調査で解明されることを期待したい。

嶋宮の建物群や苑池の構造等の解明は、まだ緒についたばかりと言つてよい。諸々の事情のあることを仄聞しているが、嶋庄遺跡は飛鳥京跡苑池に匹敵する大遺跡であるのにも関わらず、現状ではその場所の案内板すら無い。まことに残念なことである。

#### 【参考文献】

- 東 潮・田中俊明編著『韓国の古代遺跡 1 新羅篇（慶州）』、中央公論社、一九八八年。  
 亀田 博「飛鳥地域の苑池」『檀原考古学研究所論集 第九』所収、吉川弘文館、一九八八年。

奈良県立檀原考古学研究所編『発掘された飛鳥の苑池―都城的視点からの苑池―』（第十六回檀原考古学研究所公開講演会、第三回日韓古代シンポジウム）、一九九九年。